

カットモデルを通して

鹿児島大学病院神経科精神科 池畠 樹

“真っ白のWordに向かって何を書こうか悩む”最終締め切り前日の夜8時の私である。言い訳になるが、前回担当の川浪先生からバトンを渡されたときに一つテーマは考えていたのだ。研修医時代、一番頑張って勉強したといって過言ではない「ダニ感染症」についてだ。鹿児島県は全国でも有数のダニ感染症患者数をほこり、2019年にはついに東京でもSFTS感染症患者が確認される（それまで西日本でしか感染が確認されていなかった）など、意外とホットなジャンルなのだ。しかし、たった1年ちょっとの知識で経験豊富な先生方にダニの解説をしていいのか不安になり（しかも精神科だし）、この時間に真っ白なWordと向かい合う結果となった。

とにかく他に隨筆のテーマを探さねばならないのだが、履歴書等の趣味欄に延々と悩み、日々のサマリも満足にかけない人間に隨筆などとても高いハードルだ。うんうん悩みながら頭を抱えたときに気づいた。「これは皆さんのが知らない世界なのでは」ということで、医学部生時代に経験したカットモデルについて書こうと思う。文章力のなさは髪に栄養を吸い取られてしまった結果であり、ご容赦いただきたい。

8年ほど前、大学1年生の春休みのことである。鹿児島大学医学部体育館で部活動の準備をしているところに怪しげな人物が近づいてきた。「私はこういうのですが、モデルを探しています…」と渡された名刺には後に一緒に全国大会制覇を目指す理容師の名前が書かれていたが、当時そんなことを知る由も

なく、混乱する私にはこう述べた。「遠くから眺めていたら、いい髪だなあと。触ってもいいですか」内心ドン引きする私をよそに私の頭を「おお、やっぱり」などと一通りなでまわし、改めてカットモデルをお願いされた。この隨筆も二つ返事で受けてしまう私である。よく分からないまま二つ返事で引き受けてしまった。

後に知ったのだが、カットモデルにはいくつか種類が存在する。一つは理容師・美容師のスキル向上のための、いわゆる練習台としてのモデルで、一般によく知られているものである。練習台のお礼として散髪料をサービスされるなどちょっとしたメリットもある。私はというとコンテスト用のモデルであった。理容師のコンテストはいくつかの決まった髪型ごとに部門が分かれ、それぞれテーマに沿ったスタイリングができるか技術を競うものである。私はクラシカルカット ファッションカテゴリーという髪型のコンテストモデルであった。スタイル重視の派手な髪型ときれいな刈り上げを融合させるジャンルで、参考画像を写真1に載せておく。

コンテストではテーマに沿って髪型を作らなければならない。しかし、テーマの一例を挙げてみると「伝統的なクラシカルカットによる美しい刈り上げとファッショニ性のあるフロント、デザインやヘアカラーを調和させたヘアスタイル」といった感じであり、漠然としている。正解が分からぬため、最近の世界大会の作品を参考にしながら大体の髪型を決めていくことが多く、ウィッグ（マネキ



写真1



写真2

ン) やモデルで何度も練習を繰り返し、作品のイメージを固めていく。その練習の間、モデルのやることはほぼ1つでどんなときでも頭を動かさないことである。セットされた髪型が崩れるのを防ぐためなのであるが、作品を作る過程で様々な方向に突然思いつきり髪を引っ張られたり、超強力なドライヤーの熱を頭皮に受け火傷しそうになったりとやってみると意外と大変である。作品のイメージが固まると今度は時間との戦いが始まる。カットとセットをあわせて35分以内に收めなければならず、Iはカットが苦手でそちらに時間をかけるため、はじめは25分ほどかかるセットを最終的に15分以内で終わるようになった。大会が近づくと今度は髪を染めねばならない。髪を綺麗な色に染めるコツとして、まず一旦白く脱色しなければならないのだが、その際、髪のメラニン色素を分解するブリーチという薬剤を使用する。通常、ブリーチを1回使用するときれいな金髪になる代わりに、髪が非常に傷みゴワゴワになってしまうのだが、そんなやばい薬を7回ほど髪に塗りたくる。すると髪はどんどん白色に近づいていくが7回目が終了する頃には髪はゴワゴワを通り越し、

毛先から溶け出すようなトウルントゥルンの髪となる。濡れた髪をドライヤーで乾かすとハラハラとちぎれて飛んでいく様はきれいであり、その頃の写真が2である。このように限界まで白く脱色した後、デザインにあうように染色していく。文字で書くとあっさりだが、1回の脱色が4時間ほど、染色が6時間ほどかかり、それとは別にセット練習もあるため思った以上に大変である。

コンテスト本番は制限時間内に後頭部をきれいに刈り上げ、頭頂部をセットする。コンテストの様子を写真3に載せる。制限時間内に作品を作るために、ちょっとした技として当日の朝に髪を一回セットする“仕込み”と言うものを行う。仕込みによって髪に癖をつけ、セットする時間を大幅に短縮できるのだが、その後変なクセがつくのを避けるため、仕込み後はモデルは頭をどこにもつけてはならなくなる。コンテスト当日仕込む場合は車の背もたれなどに頭をつけなければいいだけなのだが、前日に仕込みを行うと頭をつけて眠れなくなる。うつ血性心不全の人のように椅子に座ったまま寝なければならないのだ。また、当日コンテスト会場には2つのスペースが用意されている。髪のカットやセットを行うための競技用スペースと、ただパイプ椅子が横一列においてある評価用スペースで、



写真 3

だいたい両者は少し離れたところにある。競技用スペースで作品作りが終わるとモデルは評価用スペースへ移動し審査員の評価を受けるのだが、移動中の振動で髪のセットが崩れないようにすり足で移動する。ミリ単位で調整した作品のためできるだけ頭に振動がないように必死なのだが、床のシートがめくれていたり、コード類が張り巡らされていたりとトラップが多く下を向かないため、かなりの神経を使う。評価スペースへ移動すると、1時間、瞬きをせず、パイプ椅子の角にわずかに腰を乗せ、股を大きく開き、背筋を伸ばして胸を張る姿勢をキープするという地獄のような時間が始まる。常に審査員や理容師、観客など監視の目があるので手を一切抜けず、終わったときに目はガピガピで全身がつったような感じになる。その様子は写真4である。

私の初めてのコンテストは福岡で行われた九州大会であった。髪型の評価はそれなりに良かったが、結果は4位であった。「ヒゲがテーマに合っていない、そもそも伸ばさない」というまさかの髪型と関係ないところでの大幅減点で表彰台を逃し、悔しいデビューとなってしまった。その後もいくつかの大会に參加したが、コンテストのデザインはかなり自由度が高いため基本は指導者と話し合いながら髪型を作っていた。Iの指導者K先生は世



写真 4

界大会で優勝経験あり、「マツコ・有吉の怒り新党」という番組の新3大・日本最高峰の理容テクニックで紹介されるなどすごい人物なのだが、天才かつ感覚型のため指導内容を理解するのがとても難しい。「ここがうよーんってきて、ここはバキバキって感じ」と言われてもさっぱりである。K先生が作品を作るときの動きを二人で観察しながら、お互いにああでもない、こうでもないと試行錯誤を繰り返していくことで、Iのデザイン性や技術は少しづつ洗練されたものとなっていました。徐々に大会の結果も良くなっていき、初めての大会から4年後の東京地区大会に遠征した際には準優勝を勝ち取ることができた。Iは何度か全国大会に出場していたが私は大学の試験などで最後までタイミングが合わずモデルとして参加することができなかった。大学5年生のときにIが理容室の経営に専念するため大会を引退するタイミングで私もカットモデルを引退した。このときの経験から研修医時代には外科系を多く回り上級医の動きをよく観察し、手術に臨むことを繰り返していたが、今後の医師人生でこれが生きるのかは不明である。

さて、医学部生が髪を染めるといえば想像するのは西医体ではないだろうか。低学年または6年生が髪を染めるのは当時の風物詩となっていたが、大学3年のとき、たまたま髪のコンテストと西医体のタイミングが重なり、コンテスト用の髪で西医体に出ることとなってしまった。当然、鹿児島にやばい髪のやつがいると噂になり、来年期待しているからなと友人からハードルをあげられてしまった。4年のときは信号機カラーに、5年のときは虹色に染めて参加していたが、6年になったとき西医体前にある通達があった。年々西医体の髪色が派手になっており医学部生にふさわしくないため派手な髪色を禁止することであった。確かに7色のレインボーカラーは派手だったなと反省し、2色だったら地味と勝手に解釈し、黄色と緑色でパイナップル型の髪にすることにした。その時の写真がある。なかなかのクオリティであり、満足しながら西医体にむかったが、会場につくと見渡す限りほとんど黒髪しかおらず、このとき自分の感覚がおかしい事に気がついた。しかしもはやどうすることもできず、ピクピクしながら大会に参加したが、親しみやすいフォルムのせいか怒られることもなく大会を満喫した。周りの人を笑顔にするパイナップルの髪型はツイッターやFacebookのアイコンにしたり、自己紹介に使ったりとお気に入りの髪型である。

ここまで書いてみたが、うまく話をまとめることができそうにないのでちょっと強引にまとめに入る。私がこの随筆で言いたかったことは何だったのだろうかと振り返ると、カットモデルをしてよかったことだったような気がする。1つ目は、普通に生きていたら全く関わることのない多くの人たちと関わったこと。カリスマ理容師からかけだし理容師、事務所に所属しているモデルや元お笑い芸人のモデルなどからたくさん話を聞き、医療系以



写真 5

外の働き方に触れ、世の中の様々な仕事をしている人に敬意を持てるようになった。また、自分の環境がいかに恵まれているかを実感した。2つ目は様々なことに積極的になれたこと。髪を染め、モデルとしてコンテストに出ると、普段引っ込み思案の私が「俺を見ろ」という気持ちになり、様々なことに積極的になる等気持ちが切り替わる感覚があった。化粧やファッショにはこういう効果があるのかと、おしゃれとは全くの無縁だった私が気付くきっかけになったのは良かった。髪を普通に戻しても、あのときの自分ならやっていたと自分を奮い立たせて今でも様々なことに積極的に挑戦をしている。

かつて『人は見た目が9割』という著書がベストセラーになったが、残りの1割は見た目では分からない。パイナップル頭の人間が医師になるとは誰も思わない。残りの1割までしっかりと患者を理解し、寄り添っていけるような精神科医になるよう努力して行こうと思う。とりとめもなく、拙い文章でしたがお付き合いください、ありがとうございました。

次号は、鹿児島大学病院 白尾貞樹先生のご執筆です。
(編集委員会)